

平成 19 年 4 月 1 日作成  
(第 30 号)

ホツマツタエ「ゆかりの地」を歩く  
天孫降臨の地と熊襲の古里を捜して

吉 田 六 雄

天孫降臨の地と熊襲の古里 ホツマツタエ「ゆかりの地」を歩く

アマテル神の系図は、アマテル→オシホミミ→ニニキネの順に続く。  
そのアマテルの御孫の「ニニキネ」は、晩年「高千穂の峰」に降臨される。だが「ホツマツタエ」  
文献を勉強して行くと、何故か不思議にもその高千穂付近に、第 12 代景行天皇の御世にヤマトタ  
ケが「熊襲」征伐に出かける。「コウス皇子 師走に行きて 熊襲らが・・・」。

また征伐後の帰りは、「築紫より 船路お帰る・・・」と記載されていて、その肝心の「熊  
襲」の所在地が明確に記載してない。そのため今回は、ニニキネの天孫降臨の地にある「霧島神  
宮」「高千穂の峰の麓」および隼人町の「鹿兒島神宮」を訪ね歩き、「熊襲の古里」を捜しに歩  
いた。

天孫降臨の地

その「天孫降臨の地」についてホツマツタエ文献の 26-41~43 文には、お後の「コノハナサク  
ヤ姫」がハラミ山(富士山)へ神上がりされた様子と、「ニニキネ」の天孫降臨の様子を対比して  
記載している。その「ニニキネ」が、神上がりされた地が、高千穂の峰になる。

(二人のこと)

朝は浅間の  
日に向ふ 日向ふ国と  
ホツマ国

(コノハナサクヤ姫のこと)

辞む月 姫は浅間に  
神となる 高千峰に入り  
子安神 浅間の神や

(ニニキネのこと)

稜威の神 かねて会う日の  
神となる 高千穂の峰の

(語句の訳)

浅間・・・ハラミ山  
辞む・・・死ぬ・消える。  
高千峰・・・ホツマ国のハラミ山。  
浅間の神・・・コノハナサクヤ姫  
子安神・・・コノハナサクヤ姫  
高千穂の峰・・・高千穂峰

## 霧島神宮

鹿児島県霧島市の「霧島神宮」には、高千穂の峰に天孫降臨した「ニニキネ」がお祭りしてある。その霧島神宮には、宮崎より足を延ばした。また宮崎駅より霧島神宮へのアクセスは、JR九州の日豊本線で「霧島神宮駅」で降りる。

霧島神宮駅で下車する人は、普段でも約10人くらいだろうか。その10人は観光客と地元の人達であろうか。霧島神宮駅～神宮までは、タクシーにて約10分くらいである。タクシー乗り場に行くと2台のタクシーが待っていて、2台目で神宮に行った。それにしてもタクシーの社内より見る風景は、緑の山々の連続で片田舎である。

神宮境内へは下車したバス停の広場より歩いて、約50mくらいで辿り着く。境内の入り口は赤い欄干の橋になっている。その右手にある「霧島神宮のご由緒」を書いた掲示板には、「霧島神宮 御祭神は天孫瓊瓊杵尊まし・・・(以下省略)・・・」とある。私の心は・・・、ホツマツタエ文献に出会って13年、やっと「ニニキネ」に出会った様な感覚になった。

神宮へはそこから橋の赤い欄干の傍を通り、その後階段を上がり前に「霧島神宮」と刻まれた石碑を右に眺めながら階段を上がる。登り切ったところに鳥居があり、鳥居を抜けてしばらく少し上り坂の参道を歩くと、写真で観た大きな「霧島神宮」を目にする。その姿は鎮守の森に映えて、ニニキネの偉功を今に伝えるには、充分の大きさと荘厳さであった。霧島神宮の赤い壁や柱に引きつけられ、拝殿より「ニニキネ」にお参りする。

その後霧島神宮の宮司である知人の「高地(仮名)さん」を訪ねたが、北海道の実家に帰省されていて残念ながら会うことができなかった。高地さんは今では霧島神宮の宮司であるが、本当の目的は「ニニキネの天孫降臨の地」を捜すことであったとのことである。そして九州を南下して「高千穂峡」も訪ねられた。そして高千穂峰を有する霧島神宮が、ニニキネが天孫降臨した地と確信を得て、ニニキネに仕えられたと云う経歴の人である。

## 霧島神宮の御社殿

霧島神宮の住所は、(旧)鹿児島県始良郡霧島町田口である。現在は霧島市になっている。その霧島神宮の変遷について、霧島神宮より頂いたご由緒書を見る。「旧記によると本宮はもと霊峰高千穂峰と御鉢(噴火口)との中間脊門丘と言う所に奉斎せられていた」とのことであり、「山上噴火の際に御炎上の災に見舞われ、村上天皇の御世に御鉢の西麓高千穂河原瀬多尾越に再興」。「その後大噴火で神殿等が災禍にあった」。「それから田口の侍世の行宮に奉斎し、今よりおよそ五百年前に現在の地・霧島市田口に再興申し上げた」と記載している。また現在、霧島神宮は、「国の重要文化財」に指定されていた。

その後、昔に霧島神宮があった「高千穂河原」にタクシーで登った。そして「旧・霧島神宮」の跡地に立つ鳥居越しに、「高千穂の峰」に向かって深く参拝したのは言うまでもない。

## ホツマの鹿児島宮

その後予定では鹿児島神宮に立ち寄る予定はなかったが、車中で車掌に尋ねたところ鹿児島へ行く途中駅の「隼人駅」で下車すると、鹿児島神宮に行けることがわかった。そのため約1~2時間の予定で、鹿児島神宮に立ち寄ることにした。また日豊本線の車内で鹿児島神宮に関する記載を「ホツマツタエ」文献より検索した。するとホツマツタエ文献には「カゴ」が1ヶ所、「カゴシマ」が1個所、そして「カコシマ」が4ヶ所記載されていた。また2個所は「鹿児島宮に・・・」

と鹿児島神宮を案じており、「カメ(船)に乗り行く カゴシマ(鹿児島)や 曾於高千穂の」の文より「曾於高千穂」の近くに「鹿児島宮」があることもわかってきた。

### 鹿児島宮の検索箇所

- 25-20 文 築紫に請えば 曾於のハデ カゴ(鹿児島)に請えども
- 25-48 文 君先づ議る なお良しと カゴシマ(鹿児島)宮に
- 25-53 文 築紫三十二の 見巡りて カゴシマ(鹿児島)に益す
- 25-61 文 鶴戸に至れば ハデ神の 招くカゴシマ(鹿児島)
- 26-41 文 カメ(船)に乗り行く カゴシマ(鹿児島)や 曾於高千穂の
- 27-82 文 おカメに召して 鶴戸の浜 カゴシマ(鹿児島)宮に

### 鹿児島神宮

鹿児島神宮の住所は、鹿児島県霧島市(旧・始良郡)隼人町内 2496 番地になる。鹿児島神宮は、隼人駅より約 1Km 程度である。隼人駅より鹿児島神社のある「北の方面」に歩き始めた。駅前の広場を過ぎ、住宅地を通り過ぎ、田んぼの一角で視界が切れた。向かい側に鹿児島神宮の「鎮守の森」が見えて来た。

鹿児島神宮の入り口は、神明鳥居が迎えてくれた。しばらく歩いてから階段を登る。登った所に境内の広場があり、神宮は鹿児島湾(錦江湾)を向いて鎮座していた。神宮の正式名称は、「大隅国一の宮 正八幡宮 鹿児島神宮」となっていた。そのあと正面の「ホホデミ尊、トヨタマ姫」等にご参拝し、宮の外に出た。そこでもう一度鹿児島神宮の案内板を見ると、神宮より車で5分の所に「南州翁 西郷どんの宿」と「西郷像」の案内が記載されていた。そして社務所より「鹿児島神宮史」と「鹿児島神宮由緒略記」を購入し、今夜の宿である鹿児島市の繁華街である天文館に急いだ。

### ヤマトタケに滅ぼされた熊襲

JR の日豊本線を終点である西鹿児島駅で下車する。そして路面電車に乗り換えて、鹿児島市の繁華街である天文館の停留所で降りる。そこから天文館アケード街を抜け3つ目の路地を左に行く。その右側に、正調さつま料理の「熊襲亭」がある。この熊襲亭の名は古代にヤマトタケに滅ぼされた、熊襲族から拝借していると云う。(お店の「由来書」より引用)

これまで、鹿児島県の地図を広げては「熊襲・・・」の名前や地名を捜すが、曾於の地名はあっても「熊襲」を見つけることができなかったが、やっと「熊襲」の名前に会えてホットした気分になり、次の日に長崎の島原に帰郷した。(この項は平成 15 年夏の旅行を原稿にした。)

### 熊襲の地を捜して(1)

鹿児島で「熊襲亭」に出会って約 3.5 年になる。肝心の「熊襲の地」が見つからない。そのため原点に帰ってホツマツタエ文献に、ヒントがないか調べた。調べた項目は、「熊襲とヤマトタケ」に関する記載である。

その記載は「ホツマツタエ 38-87 文~100 文」にあったが、文中の地名らしい単語を捜すが、「熊襲」「築紫」以外に見つからなかった。

ホツマツタエ 38-87 文～100 文

熊襲背きて

また侵す 10 月 13 日

．．．．(中省略)．．．．．

	乙女の御目に
混われは	携え入るる
花むしろ	みお上げ神酒の
戯れや	夜更け糸得れば
コウス君	肌の剣お
抜き持ちて	タケルが胸お
刺し通す	タケルが曰く
今暫し	剣止めよ
言ありと	待てば汝は
誰人ぞ	スメラキの子の
コエスなり	

．．．．(中省略)．．．．．

築紫より 船路お帰る

### 熊襲の地を捜して(2)

次ぎに約 3.5 年に鹿児島神宮で購入した「鹿児島神宮史」と「鹿児島神宮由緒略記」をもう一度、読み返して見た。

すると鹿児島神宮は、鹿児島神社→大隅国八幡宮→大隅国正八幡宮と変遷していた。だが鹿児島神宮の最初の神社名は「鹿児島神社」と云っていたとのことである。そしてホツマツタエ文献にも「鹿児島宮」の名前があり、ホツマツタエの足跡を「鹿児島神宮」が残してくれていた。

### 鹿児島神宮の変遷

- 927 年(延喜式)．．．．鹿児島神宮は、鹿児島神社とある。
- 1031 年(平安時代後期)・大宰府では元命をして大隅国八幡宮を検知せる。
- 1055 年．．．．．石清水八幡宮の 20 代別当清成が大隅国にある宇佐末寺・末社の雑務をとることを大宰府から認められる。
- 1088 年．．．．．官符に大隅国正八幡宮とあり。

また 1055 年の項に「石清水八幡宮」が見えるが、宇佐八幡宮もまた九州の宇佐より中央に上り移動し変遷していたとのこと。なお最初の「宇佐八幡」は、「ホツマツタエ」に関係する神社である。

### 宇佐八幡宮の変遷

宇佐八幡→(749 年)奈良・手向山八幡→(895 年)京都・石清水八幡宮→(1180 年)鎌倉・鶴岡八幡

## 鹿児島神宮史より見る「熊襲の地」

鹿児島神宮史は平成元年に編集され、編集者は三ツ石友三郎という人であった。三ツ石さんの書物を調べて見ると、他にも隼人町郷土誌を1985年に編集されていた。そしてこの鹿児島神宮史を読んで行くと、この鹿児島神宮周辺に、古代の「熊襲の地」があった様だ。そして国分平野(隼人町も含まれる)には、熊襲七隈と呼ばれる地名があり、その地名は「隈崎」、「平隈」、「富隈」、「笑隈」、「獅子隈」、「恋隈」、「星隈」の七地点を指すと云っている。

そして極めつけは、隼人の分布である。ここで云う隼人は、隼人族と云う集団と考えられる。各地に散らばった隼人は、阿多隼人(のちに薩摩半島に勢力を拡大)、大隅隼人、薩摩隼人(主に川内市に定住)、日向隼人(現在の大隅・薩摩地方に住む)、曾隼人(熊襲の本拠地)、衣隼人(今の指宿)、甌(こしき)隼人(甌島)および種子隼人(種子島)等に分布している。そして捜していた「熊襲の地」は、曾隼人(熊襲の本拠地)と述べている。

## 熊襲の本拠地、曾隼人はどこか

鹿児島神宮史を編纂された三ツ石さんは、曾隼人を熊襲の本拠地と述べられているが、古代の「曾」の地名は現在のどこを指すのか。疑問は募るばかりである。そこで三ツ石さんがまとめ参考文献の古事記・日本書紀・続日本書紀・日本後紀の記載を見ることにした。すると、古事記

築紫嶋・・・築紫国、豊国、肥国の後に、熊曾国・・・が見える。

### 日本書紀

景行天皇12年・・・「熊襲国(旧・日向)反きて朝貢らず」と熊襲国が・・・見える。

### 続日本書紀

- (1)702年筑紫7国・・・筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後、日向があり、最後の日向国は、現在の日向、大隅、薩摩の3国になる。
- (2)713年日向国肝坏(きもつき)、噌於、大隅、始羅の4郡を裂き大隅国を置く。・・・と、初めて「噌於」の名が見える。
- (3)755年噌於郡を割いて菱刈郡を置く。・・・と噌於が見える。

### 日本後紀

- (1)804年桑原郡が初見する。
- (2)824年大隅4郡は本拠地を始良郡国分平野とし、噌於郡が最北端である。和名抄噌於郡に噌於郷あり。・・・と現在の国分平野の最北部に「噌於郡」の名が見える。
- (3)927年完成の延喜式に、贈於には噌啖とあり。・・・と「贈於」「噌啖」が見える。
- (4)1197年噌啖郡の内に桑西郷、桑東郷の名称あり、鹿児島神宮は桑西郷にはいる。・・・と「噌啖郡」に鹿児島神宮があることがわかる。

### 明治時代

- (1)明治11年(1878年)大隅国噌啖郡(鹿児島県東噌啖郡・西噌啖郡に分割)  
(近世日向の南諸県郡が大隅国にはいつて東噌於郡と称したので、この噌啖郡は西噌啖郡と改称した。)
- (2)明治29年(1896年)西噌啖郡+桑原郡+3郡が合併し始良郡に改称と、なった。
- (3)明治29年(1896年)東噌於郡は噌啖郡に改称した。

## 昭和時代

- (1)昭和3年(1928年)西国分村を隼人町と改称した。  
(702年薩摩、隼人の文字が見える。)
- (2)昭和47年(1972年)鹿児島県(東)嚙啗郡は、曾於郡(桜島の東～南東の大隅半島部)に表記を変更した。

## 平成時代

- (1)平成18年(2006年)曾於郡の財部市、末吉町と大隅町(桜島の東側の大隅半島部)とは合併して曾於市に変更。曾於郡としては大崎町(桜島の南東の大隅半島部)だけが残った。・・・と昔の東嚙啗郡が、曾於市と曾於郡になった。
- (2)平成17年(2005年)国分市、始良郡の溝辺町、横川町、牧園町、霧島町、隼人町および福山町の7市町が合併し、霧島市に変更。・・・と昔の西嚙啗郡が霧島市になり、霧島神宮のある隼人町も霧島市となった。

## 年表のまとめ

前述の様に古事記～現在の地名の変遷を調べて見るが、時代が下る度に、地名の曾於の地域は、桜島の東～南東地区の大隅半島に移動していることはわかった。そして探し求めている古代の「曾隼人(熊襲の本拠地)」の地は、次の年表の抜粋「始良郡国分平野とし、嚙於郡が最北端である」そして「嚙啗郡の内に桑西郷・・・、鹿児島神宮は桑西郷にはいる。」より、現在でも鹿児島神宮がある鹿児島県霧島市(旧・始良郡)隼人町に、「熊襲の本拠地」があることが推定できる。

## 年表の抜粋

- (2)824年大隅4郡は本拠地を始良郡国分平野とし、嚙於郡が最北端である。和名抄嚙於郡に嚙於郷あり。・・・と現在の国分平野の最北部に「嚙於郡」の名が見える。
- (3)927年完成の延喜式に、贈於には嚙啗とあり。・・・と「贈於」「嚙啗」が見える。
- (4)1197年嚙啗郡の内に桑西郷、桑東郷の名称あり、鹿児島神宮は桑西郷にはいる。・・・と「嚙啗郡」に鹿児島神宮があることがわかる。

## 隼人町が、熊襲の本拠地であった。

更に鹿児島神宮で購入した資料で吟味した。すると「鹿児島神宮由緒略記」の「附近散策」の項に「隼人塚・・・熊襲の供養塔(隼人駅南300m)と記載してあった。また住所は霧島市隼人町見次とあり、飛び上がるほど嬉しかった。今まで「熊襲の地」を色々探し求めて来たが、JR九州の隼人駅にほど近いところに、熊襲の供養塔があることは、この「隼人の地」が「熊襲の地」であることが確信できた。そしてこの隼人町に奇しくも、明治維新の立て役者の「西郷隆盛の宿」があり、その西郷どんも「熊襲」の末裔であることが判明した。そしてこの熊襲の一団は「ニニキネ」の指導の元全国を開拓し続け、最後に「ニニキネの天孫降臨」で遙々、「高千穂の峰」に永住した一団と推定される。そしてこの様な「ニニキネと熊襲」の関係を結びつけるのは、私ばかりでしょうか。このことでまた隼人町に調査に行くことになる。

以上